

ワイルドは生きている

村上 昌美

(麻布大学附属瀧野辺高校教諭)

「芸術が真に映しだすのは、人生ではなく人生を観る人間である。」(D・G) ワイルドの傑作・童話や評論にはこの「観る、眼が在る。その焦点は日常性を超えた深い思索から生れた美を基軸としている。俗世間の煩雑な人間関係や社会構成の原理の分析に向いているのではない。あくまでも人間の魂やその在り方に、つまり内面の問題を対象としている。「文明は奴隷を必要とする。」(S・M) と今日の我々からすれば驚異的な宣告であり、肉体労働は全てロボットに任せ、人間は高度な文化文明を思考すべきだとする彼の姿勢はその意義を失ってはいない。これは都会的人間の発想と限定することは狭小な精神である。彼には思想・哲学の体系化された業績はないが、「キリストは社会再建を試みようとはしなかった。」「民主主義とは人民の人民による人民のための脅しにすぎぬ。」等のアフォリズムやエピグラムが数多くあって、それは万卷の哲学・思想書にも匹敵する散文詩的な警世の金字塔となっている。

実はこのことが彼の文学と芸術の真髄だと思う。現代の人間は知性が無ければ生きられない状況に置かれている。人間とは風俗習慣のある地域社会で共同生活することでしか生きられない精神的存在物である。そこでは孤立することは死を意味する。しかし、人は知的であればある程自由な個性の発現を希求する。この点に人が人である故の自家撞着が生じ、これが誘因となって人生の深淵への陥落を憧憬する場合もある。この時、彼の言葉は優しく愛に満ちており、観念的思考の逆流を惹起させる効用がある。また他方では、時間空間を無視した変幻自在で不統一な魔性の言語の羅列が死の淵からの救済となる。

今日「発想の転換、の時代だと云われている。科学技術と民主的社会的構造の矛盾点と更に実存としての人間の孤独な魂の三者三様の分裂状況を彼は約一世紀前に予言したのだ。

みちのくの春によせて

——わが邂逅——

梅津 義宣

(尚絅女学院短期大学助教授)

みちのくの春はおそい。

南の各地からはソメイヨシノの開花宣言がつきつぎにきかれるというのに、わが家の庭先では、雪の塊の間から、福寿草がようやく艶のある蛍光色の瞳をぽっかりと覗かせたばかりである。真白い蔵王の峰々から吹きおろす風も肌につめたい。

ほんのちょっとしたことが人生を左右することがあるように、ワイルドと私のこれまでの十数年間、いやこれからずっと続くであろう付き合いが始まったのもふとしたことからであった。

その頃、私は仙台の高校で教えていた。とりわけこれといった理由もなく副読本のテキストに使用したのが *The Happy prince* で、これがワイルドとの運命的な出会いの始まりとなった。

教室での読み始めは、いともあっさりしたものであった。読み進むうちに生徒も私も何とも名状しがたい感動と興奮につつまれていった。王子とツバメの自己犠牲的献身の崇高

さ。“Swallow, Swallow, little Swallow”——哀愁を帯びた淋しさを残像としてのこしながら、良心を呼び醒ますように幾度となく繰り返される王子の囁き。この囁きに、私は「交響曲第5番ハ短調作品67」《運命》のそれぞれの楽章で美しく変奏され繰り返されるあのリズムと旋律を重ねた。——ワイルドの研ぎ澄まされた「音」への感覚。さまざまな反復、倒置、独創性に富む比喩的表現、幻想的な色彩表現などはすべて「音」を核として繋がりが、絡み合っている。——うれしい発見であった。

こうして、わが「ワイルドの文体に関する考察」は始まったのである。そしていま、「ワイルドの風習喜劇におけることば」をテーマとしてワイルド研究に動いている。

おそいみちのくの春のひんやりとしたぬくもりのなかに、ワイルドとの初めての巡り合いの思い出を懐かしく甦らせている。

出 会 い

深澤 清

(明星大学大学院生)

若い頃、人間にとって自然な生き方とは、いかなるものであるのかと、しばらく考えていた時期がある。人為を廃して自然に生きる「無為自然」や、それとは対照的に、人為こそ人間の自然な本性であり、それを捨てることはかえって不自然であるとする「有為自然」など、今から思えば、あれこれ真剣に考えていた。結局のところ、自分はどうも後者の考え方をとっていたようである。

我々の日常生活は、機械文明に代表されるように、人工と人為によってとりかまされ、人間本来の素朴な生活とは、だいぶかけ離れた環境におかれているのが実情である。そういうなかであって、もし無為自然を忠実に守ろうとするならば、我々は世俗を避けて山中に隠れ住まなければならなくなってしまう。自然なる道は、そのような消極的な態度ではなく、むしろ世俗にあって、世俗にとらわれず、人為を駆使して自己の完成をめざすことではないだろうか。当時、そのように考え始めていた。荘子の言う、「彫琢して朴に復る」という言葉が、絶えず頭の中にあっただようである。

それでは、いかなる社会的武器を持てば、世俗にありながら世俗にとらわれず、自己実現が可能となるのか。出会いとは不思議なもので、その解決の糸口を与えてくれたのが、ワイルドであった。

世俗的な生活を送ること、社会的規範や道徳に保護された美德を守ることは、なるほど人間らしい生活のように思われる。しかし、ワイルドに言わせれば、そのような生き方は単に生存(イグジスト)するだけで、生きる(リヴ)ことを知らない人間のものということになる。人間はだれでもはかない人生の片道切符をもっているが、それを最も美しく生きる方法をワイルドは知っていた。社会から身を守り、自己実現を可能たらしめるひとつの方法が、彼のダンディズムであろう。

「感覚の暴虐」とよぶほどの影響を受け、自分の生き方に指針を与えてくれたワイルド。彼の投獄、孤独の晩年であって、世間に嫌悪されながらも最後まで人生の表舞台に立ち、「人間」を心の底から愛し続けていた姿を想う時、ワイルドの心の繊細さと同時に、人間の強さというものに胸を打たれるのは、はたして私だけであろうか。